

グリフィス来福150周年記念 春季特別展

# グリフィスが見た明治の福井 ～ The Mikado's Empire ～

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 2階 企画展示室
- 会期 令和3年3月20日(土)  
～令和3年5月5日(水・祝)
- 休館日 4月12日(月)

本年は、福井藩のお雇い外国人であったウィリアム・エリオット・グリフィスが最初に福井を訪れた明治4年(1871)から、150年目の節目にあたります。

グリフィスは、福井藩の藩校明新館で当時最先端の化学知識を教えるとともに、江戸時代の風景が色濃く残る福井城下や周辺の村々を散策し、人々の生活を丹念に観察しました。帰国後は代表作『The Mikado's Empire』(邦題:『皇国』)などで福井での体験を綴り、日本の歴史や文化を欧米の人々に紹介しました。のちにアメリカにおける日本の歴史・文化の第一人者と評されたグリフィスの原点は、福井にあったといえるでしょう。

本展では、福井に伝えられてきたグリフィスの足跡を物語る資料を一堂に展示し、福井におけるグリフィスの業績を振り返ります。また、母校ラトガース大学で交流をもった日下部太郎から始まり、グリフィスの晩年まで続いた福井の人々との親交をご覧ください。



W. E. グリフィス (1843～1928)

## 第1章 福井人が見た「異国」

江戸時代、日本に住む人々はいわゆる「鎖国」により海外との交流を制限されていた。しかし、その中であっても、人々は島国日本を「異国」が取り巻く姿を描いた世界地図を買い求め、「四つの口」(松前・対馬・長崎・薩摩)を経由して渡来する書籍や器械、美術品などを舶来物として珍重し、「異国」への関心を持ち続けた。福井藩では、16代藩主松平春嶽(慶永)が世界情勢や西洋科学技術に大きな関心を示し、主に藩校明道館へ世界情勢を記した書籍や、科学器械類が集められた。本章では、江戸時代を生きた福井人たちの「異国」に向けた好奇心を感じていただきたい。



南蛮形槍 越葵文庫 当館保管



ゆどうき 論動器 越葵文庫 当館保管

## 第2章 アメリカとの出会い～佐々木長淳・日下部太郎～

開国後、横浜や長崎などに設定された居留地には、外交や貿易に従事する外国人が集住した。彼らを通じてさまざまな海外情報をもたらされ、日本国内に流通する情報の質と量は開国以前から大きく進歩した。中でも、欧米諸国の軍事技術や政治制度に関する情報は需要が高く、富国強兵を目指す幕府・雄藩が積極的に収集した。福井藩でも、洋式船の導入を始めとした軍制改革が着実に進み、さらに慶応2年（1866）に日本人の海外渡航が解禁されると、藩士の海外派遣にも乗り出すようになる。

本章では、福井人として初めて渡米した佐々木長淳、そして留学生としてニュージャージー州ニューブランズウィック市のラトガース大学（Rutgers College）に学んだ日下部太郎に注目し、福井とアメリカとの間で育まれた交流のはじまりの様子を紹介する。



佐々木長淳（1830～1916）



日下部太郎受贈のゴールド・キー  
「F・B・K」 当館蔵



日下部太郎（1845～70）

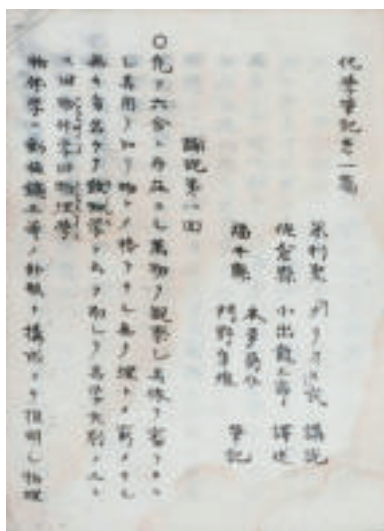
## 第3章 若きグリフィスと福井での日々

明治4年（1871）1月14日、W.E.グリフィスは藩校明新館で理化学や英語などを講義するお雇い外国人教師として福井に着任した。グリフィスの滞在は10か月と短いものであったが、科学器械を用いた実験や当時最新の化学理論を講義し、生徒や役人たちに新鮮な驚きを与えた。また、廃藩置県によって変わりゆく明治福井の街並みと人々の活気に触発を受け、その情景を豊かな筆致でアメリカの人々に紹介した。

本章では、福井におけるグリフィスの業績を振り返るとともに、グリフィスが見つけた開化と伝統が入り混じる明治福井の姿を紹介する。



W. E. グリフィスが住んだ洋館  
（左の建物）



グリフィス講述「化学筆記」 当館蔵



W. E. グリフィスと福井の生徒たち

# 明治初期のグリフィスと周りの人々

## 東京

松平 春嶽 (慶永)  
MATSUDAIRA  
Shungaku (Yoshinaga)



ガイド・フルベッキ  
Guido Herman Fridolin  
VERBECK



化学教師の  
選定を依頼  
グリフィス  
を紹介

彼ほど明敏な  
人は少ない  
長崎で英語  
を学ぶ

## アメリカ・ニュージャージー州

日下部 太郎  
KUSAKABE Taro



マーガレット・グリフィス  
Margalet Clark GRIFFIS



ラテン語を  
個人教授  
ラトガース  
大学の先輩

マギー姉さん  
父亡き後の  
大黒柱

養父子

私を日本の朋友  
だと思ってほしい

福井行きを  
助言

## 福井



松平 茂昭  
MATSUDAIRA Mochiaki

将来を見通  
した改革者

授業に感心  
"Prince" (藩主)

福井に導いた人

ラトガース  
大学の先輩

明新館の生徒たち



愛する  
生徒たち  
先生に付い  
て行きます

何としても福井  
に残したい  
評価の良い  
学校の責任者

抜け目のない人  
明新館の同僚

## ウィリアム・エリオット・グリフィス William Elliot GRIFFIS



村田 氏寿  
MURATA Ujihisa

東京に勧誘

御雇洋人  
取扱方

私の大好きな人

ルサー  
Alfred LUCY

明新館の  
後任たち

この人と語り  
合うのは最高に  
楽しい

私に最も関係  
ある人。英語が  
かなりうまい



由利 公正  
YURI Kimimasa



佐々木 長淳  
SASAKI Nagaatsu



橋本 綱維  
HASHIMOTO Tsunakore



ワイコフ  
Martin Nevius  
WYCKOFF



マゼット  
Edward Hutchinson  
MUDGET

## 第4章 福井との絆

グリフィスは明治5年（1872）に福井を離れたが、教え子や松平家の人々との交流は続き、福井との繋がりを持ち続けた。帰国後は福井での体験を記した『The Mikado's Empire』など数々の著作を世に出し、アメリカにおける日本研究の第一人者として名声を博した。また、最晩年の昭和2年（1927）には福井への再来訪が実現し、歓迎する市民たちの前で日米親善の大切さを訴えた。

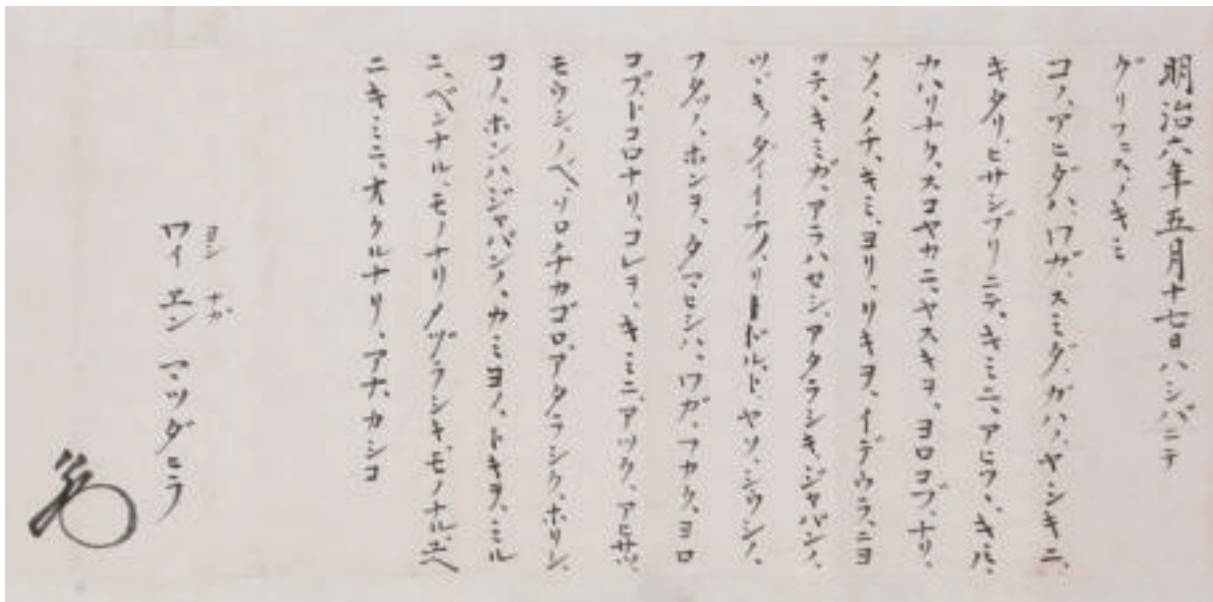
本章では、50年にわたって続けられた福井の人々との交流に関する資料を展示し、日米関係が揺らぐ中でも途切れなかったグリフィスと福井との絆を紹介する。



贈呈された羽二重織の着物を着用するグリフィス夫妻



グリフィス自筆色紙「Japan - Peace Plenty, Equal Rights, Just Laws!」 福井放送蔵 当館寄託



W. E. グリフィス宛松平春嶽書簡 明治6年（1873）5月17日 福井市春嶽公記念文庫 当館蔵

### イベント

記念講演会 グリフィスの来福150周年に当たって 令和3年4月3日（土）  
講師：細谷龍平氏（福井大学国際地域学部 特任教授） 当館2階講堂にて

### 次回の展示

企画展示室 夏季特別展「龍馬と福井」 令和3年7月21日（水）～8月26日（木）

展示解説シート No.139

令和3年3月20日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1  
電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489  
担当 山田 裕輝

印刷 備宮本印刷